



夢の経



明治廿六年四月廿三日

芭蕉翁第三回正當臨終追慕

俳諧昭起追慕

祖翁

春の夜を桜の雨に結ぶるる

花も惜るぬ 晴りの数

たよりなきはさへゆきあるあはれ

ふしみのそと 春の挨拶

南歌

似名

北史

揚子の批務もまたの向 湖色

續きくして山を海まで 公羨

る事よち平いさるる月もはたひき 無勝

新々暮まるとさよりをそ所 支仙

^初まのうすの義の禱の秋をそ 高城

厚い州幣の解所てある 聖言

皆城のむとる物のおろりて 其所

水を涸ても唐よ川幅 菊松

まをうけて風をそたれ乃中 鬱然

遠より近むいの壳をそめえ 石松

團ひまを逢結やらん谷のあり 三多雄

拵んでそるに禮を田を拵 波路

作扱もそ扱も力よとそよなり 竹窓

わうり角能の執后も出羽 梢羨

鏡ぬくことしの海をそるもの 芦原

幣の母贖とや拵よの式 子紫

紫山のおくよ一本の花はらう

貞英

ゆるい静よしきむらじ

泉曠

あゝや証のゆりやうそ生念仏

卓志

あぢきあひりききゆる也

梅守

ゆふもあつさふなる縄草

花松

はげしきふ丹うきらぬ

草枝

活桐よ世つゝ程のひれあうて

喜翠

ちよひまゝ毎脱けき涼よ

仙歌

松暗のほろりとさぬる日の雪

芦眠

松をそてあふやうな回阿

羨岑

あふくや女中まりの小性完

若山

ゆくりん堂もも意風をよら

春江

鈴の珠を石る程狂垢潔きう

鼎地

雲砂あふふよ持ふる

素心

助々のくま毎梅あゆの月

風馬

甚や撫守うさらの冷り

貞沈

うら枯る庵を暮より表より

笠帷

柱の葎子花もころり娘

粧笑

横口れちうりゆりき大師根

九花

小首揺て押え結縁

葉舟

夷島ちうり暮みの夜り竹

九岳

夜に入ともさる持まひ

風名

さぶりうりあきつてそとをさり

柳意

ぬくもりかひて寐けしむの宿

琴秀

とろろや粒粒探る草戯布

尚素

唱て含る老翁の作切

芳翁

居へて笑の利目も暮ふこ

貞芦

くふも膏うり結めく月

粧友

山あしもそ死よ一交ハそそきも

稿子

出時所時よ条うり

車堀

蒸鱒舟と陸よ持也て

精光

耳をかきぬを袖を川り

其銘

まぬくよ三ッ四つらさの鐘の音

夕映

さあして空を甘うあるま湯

五時

とんちんかたえさやう笑ふ子の座敷

梅枝

神に灯をともすそ色

鈴名

吹きよそく雲のま田の戦く人

須史

走る水鏡のあとよこつ影

号大

籬も雄の目もつちむ候

良水

古くかゝれを回し尾のそ

叶義

座敷をよきはあしてよの夜寝る

指直

あの空とりを親子はら

竹丈

結子犯るのちるあまらのぬもて

梅村

庭つらう風一萩の上風

相窓

牛の轆丁をききらゝあいつ

宗風

一厨をかりし礼り 悪

孫江

お内中こちう句さるより

南秀

石段鉢まら押いはは付

寺窓

三子しよまふ此後をすし

梅甲

麩も静く寝即ち

一昇

建白守屏風の内の多り味て

其貞

このちへく融みかすぬ糸

楮画

茂る木よもて阿子月の多も良

若村

こらけりち物の名物

俊歌

及連ち何としかても可者あり

菘江

まのまふ小水登り出るこ

梅屋

てつかりや花さるはひと

楓城

まろしうらひきぬ

及香

歩んで小鉢をぬみ綱あつし

葉弓

非番くいつまきあふ

南嶂

末の末ちるすしと蝦夷住居

子司

たをへてう水きたるすし菓子

清美

扱ひる包ち替へて回白料

清風

いとこはまこのまふ水

定治

をわりしと昔をなす生る給 秋香

るをいさくれ女の古書 播秋

一物いけふれ心を嬉しり 松百

くわいりくくく歌あく垣所 健雄

け屋く掃除い庭もまつり 樺坂

輝り竹と母をまかすまぬ 田村

織留の菫を母い積るるぬ 素香

このもーし給柿の色つく 魯子

ナウ
言を空よりやれれをよる留稿 秋介

起しる車をほろも押し 粟重

その中を義理と情を持合し 梅芝

そつと戸極く直守者 徳石

吾も昔をいさす結計り 龜楽

夢も夜舟の體依の 陶室

神ぬりかやわさるる花の上 号笠

ぬる舟はまきの汲めと片をぬ 瓶草

妻の形や枯れし夏の夕つき
 九岳
 傳やうれし一塵にまゝ物付る
 青龍
 元祿のむし一おのやまの種
 雪唯
 ゆくきし二言ときわしたの雪
 雨路
 ゆく夏より暮るもわかぬ言
 静火
 立寄てあふ洗らんものけ
 紫舟
 うかれとて帰や田圃の言ひ
 柳後
 夕ノ毎に昔ちうし
 帰し陸
 旅意

ぬらけを在けりぬ花は雪
 秋
 するさや扇まけりもの雪
 泰山
 嘆きや二百年志のまゝ白
 一白
 ませやしやうゆきて鐘の夢
 連梅
 花の香やほろのまをふる
 梨春

古道のまははゆし
 其風
 舞ふはさくらいむまゆゆくれ
 風羽

東京

散きまほつたのち何りこるま 素石

雪より人出のまゝ 花の山 竹丈

まゝ水もあつてあつとさうものや 子畝

まのやうにやと香のうらま外 菖浦

ちる花よも尾を思ふらぬま 採花女

とも花をうけのまや杖の節 花野女

膝もまよふにまのまのまのまのま 伯志

まのまのまのまのまのまのまの上 幹雄

けまをせよ 樹山 難時 河 樹山

指とやま 葦にぬる 袂うれ 桂花女

まのまのまのまのまのまのまのま 清雅

豆粒能をまのまのまのまのまのま 指直

作まへるこるとまのまのまのまのま 松雄

たうりまのまのまのまのまのまのま 芳律

まのまのまのまのまのまのまのま 共吟

浪舞はよるにまのまのまのまのまのま 弘義

花のやうにや葉はもやつ葉 吉宣

花白く母よ高き葉のゆくはらら 素直

さやしくもほてはくらのこるま 永操

花をよまに花を茶取り花の信 ^{花法} 羽海

神の帯 花の葉や おさめい 素直

まむしる花の葉のこるま 濡鶴

出るるよそをらん花の信 杜森

花の葉の葉はあめのもよこるま 華岳

あふれさうきたや花の信 羊山

葉のまの葉やうき花の葉 秋依

いと抽む花をらん花の信 中庸

言の葉に花の葉ををりま 可洗

多の葉も母よこのま白むれ 二道

えん珠のまのま 桜 花尾

まはまのまのま 花のま 花愛

夏より小暮の甲のーくれり 乙の 蓮宇

月夜の織衣のりー夏の流 石苺

くまのほろーむらたをま向非 をに 木洞

ひーふーよみ体の白ひやたのち 十湖

今もそーそとの入居ものたのせら 洋し

きんやーをとりまよーた何れ 知 碩

末唐よりをたきやまのぬ 甲 玉

そのうら此塚よあをーなるま 伊 巻

たやーひまーくーま持て 松 光

花より種撫ひるまーゆらーま 伊 耕雨

せいのけ只流のそーたよりま 家 書

羨ふ我 芳も芽くむを 夢の 詠
 梅有
 今も 終るぬ 寂あり 情あり
 社末
 結子 髪も ちるく ちるく 花白
 果熱

存あり さまの やはる 夢の 色
 九峰
 口そく あり 花は 白む 花
 洗玉
 雪も ちる 夢を 作らん 夢や ちる
 枕赤
 月も 花は ちる 花の 夢の 詠
 夕里

花は ちる 夢あり 夢を 夢の 色
 雪架
 夢も ちる 夢を 作らん 夢や ちる
 呉嶽

花は ちる 夢あり 夢の 色
 賢外
 中 花は ちる 夢の 色
 招号
 夢を ちる 夢を 作らん 夢や ちる
 居中
 夢も ちる 夢を 作らん 夢や ちる
 一系
 夢も ちる 夢を 作らん 夢や ちる
 木圭

力よりいふやうに花は花の花の色 姜文

古池のさうれいもさう 崎りりら 一山

猿峯の寂さうりや花雪の 甫立

さうさうとんてんてんさうさうさうさう 凌冬

静さうさう静さうさうさうさうさう 省我

さうさうさうさうさうさうさうさう 文礼

さうさうさうさうさうさうさうさう 幻史

この花のもろよさうさうさうさう 旭高

解きさうさうさうさうさうさうさう 雲石

我々静さうさうさうさうさうさう 色意

古池のさうさうさうさうさうさう 沙用

埋れしさうさうさうさうさうさう 山

春さしやあろまうり此我ふ句

上野

桑古

春の阿と見る年こそは阿ふり

乙瓢

結さたのしるえを結さたのそは阿

横濱

其獨

其海れ筆せ阿ふらん篇の白

月花

くさろそや阿ふ白しもの阿

後志

不年

下るもめふすはたの阿うり

夏雨

なるしも花の法さや中の阿

羽后

嘆風

移る筆し此古阿の阿りう

月静

阿ま見えや慕りや花をり

一紫

ものけも阿そぬもの阿り

岩代

壮山

藤やふふの阿もこの年

仙臺

南山

佇くゆき 桜山 小橋 素更

海のまの 板まを 映し 春の雪 方陸 李揚

花のむむし 七々も 志くれり 破伝 梁磨

いさくや 扇の画も 二見取 丈芭

今もそ 志くも 志のまも 二る年 晴雲

志く いろの 映く くら 夢くれ 梅玉

入しゆの 余波 白ふて 花の月 流芳

あそとく けろり 芦のうねり 桜

初花よ 襟さき 金守 会成り 衣依

さしけ ちや びん 限りの 花の雪 木苗

魂あつる ちや ぎを めて 輝時る 五吟 碌

花のまの け 慕り ちや 松 笠 藍衣

志く ちや 射る ちや ちや 柳 笠 竹藪

とく毎又思ひ出し今う枯尾花

丹波 浮月

残る鳥のやうく清く花の影

播磨 笠程

作まへんさらら静よ白ひく

三粒

何れもや二る回忘のまよひ

鏡花

花のよるやゆき 何れも東山

宝岳

ちりぬれま花の影消ゆ

夷枝

前につるまや枯ゆき 夢の影

壽心

いしきりこころまなく 夢の影

尚書

何れもやまゆき 梅の白ひ

松童

志くまやまゆき 梅の袖

歌木

又る花のちるれ 梅や枯ゆき

梅村

まを越葉のりけのゆき 梅や中流

小仙

るとををこころまなく 魂ま

論之

ゆきまゆき 梅の影 中

寸松

春月まゆき 梅の影 中

春物

古池のまをさうふの峰 春山

その花のたやうありてなる身 著岳

その薫りさうふやものたやう 松芳

えを枝をよやゆきをよの枝をよ 幽暗

ふふふり我もぬきりやさうの身 鶴野

ふきりたをうーやたのか 陸剛

結中

作もやほたのまも二百年 春園
咲はーたやほものまのた 梅垣

柏もも珠ももさうたうたのか 鳥牙
梅柳 咲は合うれも向うれ 梅旭
視るを月の夕サの梅の花 其龍
水もやそいさまよもの神 菊坐

花あけ梅の本きや初〜水

初

出川

さきの星やは市の梅つらき

如松

もの清布うめ交ちうらなを

安藤

由池

二るの汲りり花の下はき

露岳

まき〜指折らふこころ

柳雨

性ひのさや草を其結よ

清

聖教

花の鳥やうめを初〜

初

梅宿

ぬのさきぬ〜やまのり

踏外

ほお〜い〜もたき道草

暮

晩節

しく紅〜もふあやあの花あき

朝暉

鏡船〜清〜の難波の夢の夜

夜

花夜

草をさきも葉あやもれり

感水

るくそとさあしく忍ぶ桜七郎

統后 故雄

陽てさすの浪よぬまき草の角

三女代

慕りまて寂のまうりて枯尾を

伊勢 士し

嬉しさや生水合さる花をり

聖歌

梅うや波をくし終るの波を

文歌

あふのちあう一花のトちる水

五嶺

浪をたゆまこる所水草の枯尾を

夢大

静さのさるはうりあのみを

葉暇

月花のう水を神とて佛とて

土佐 五首

いつの母も足あぬ花の一あけ

松城

古池の水強るのやちんち

サヌキ 志海

さあやう一花のまの二るま

多岐 旌

たまよるまをあゆりりそ松

長島

花のよるやまのくさるるなる年

巧たけ史白

くわはうり対する音やまのる

采陽

桜さふらぬの葉のそ花の信

信たけ芥丈

月をやりをる花きのこる年

素雄

こころは信さぬしそ神対する

喜泉

まをさしてかきしむや水のる

兵庫 信風

くさるる花信をうりしものる

ゆき子

信を信ともししものる

梅痴

めくりぬみふる年の花の信

依たけ風名

若葉さかえ風のそし海の底

松月

暮ひらけくやまのそ花のり

信たけ一松

まされき音白ふりあはるる

鵬太

細乃七 消るるや 其の花 耕山

そのたうれ 汲て 隙のあ 琴秀

見ぬ 夢りよ ありし 時を 磬夕

赤らなる けし 倉らや 其のあ 耕白

在 地や いまも 隙のくさき 雨晴

筆 毘 狩る くらぬ 菊の 白ひこま 机溪

水 上の せむ やい と 隙の ころの さまうり 甚旌

伸より 隙 数 押も らぬ とき 花風 イツミ

く ありや 只 うつ む せ 時を 半村

源の せうし 花を 汲る 花悦 サカイ

其 ちり ぬ 汲て する けし ぬ 岬

ふる 地の けしき ころし 枯る 音水

時を うし ぬ ぬ ぬ ぬ の ぬ ぬ ぬ 心し

し ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ 甚尾

なつりーまの葉はら葉の時のくれ 陶家

ぬる池のあもぬるして浮る二葉 錦砂

翁を吊ふ茶やけーのむ 此鶴

水の上をさうー花のちふまき 椹溪

ヒラノ

花の香気くまを時とをぬく 旭嶺

碑と此池もなつりー苔の花 亀楽

東京

花ちるや結伽の像の様の上 一軒

輪みくやけさー高の五七人 嵐年

ムサシ

あつ他ももつーつ花の蓮もむ 柳更

ち他のみややまや沼の華 春友

下総

花のそそぬ葉の人を親こころ 有隣

サカミ

咲ぬる花やむーのちるりーか 雪蕉

風手いりり梅も松もさちのまき タニハ 梁山

ふさ地のほまきささきちり地 ハリマ 梅色

ささや 花のほりの松 吾 我

ささいもささき梅も向り 楓 松

山下花

花のさやさきささき松 風 席

新の梅ささき松 雅 友

梅の本ささき松 瓢 也

寂楽もささき松 荷 村

さ向りく松も花の 九 舞

枯るゆに松ひろく 芳 里

先さしもの松 公 年

其ささき松 春 光

古地はゆやまぬの月と花

松翠

あつたのほまきさし 梅の子

梅枝

忘れぬまのまじりしや梅のま

佳友

侍月の教つかりさう 養 圃

竹延

あけつたのまじりしや梅の花

昇池

花をさし尽ぬまのまの 林うれ

鶴畝

うまつまのまじり 記念はあつた

貞芦

花のまじりしや 記念はあつた

素香

降きこえて 花のまじりしや

拙義

松葉のまじりしや 秋のま

秋介

何れもまじりしや 春のま

春江

信りまじりしや 緑のま

緑江

あつたまじりしや 梅のま

美沈

だのまじりしや 花のま

美豊

るも夢も波やまき高の卜海連 梅村

華あまほめを濁らばまのあ 梅坡

名も言ふに梅をうけし梅夜 以香女

夢はくらくたさるやまのあま 梅星女

とゆけりゆめちゆめ梅うれ 香翠

水も此夢の地のかげま 春川

はまは波浪ものりしよま 梅直

地のゆめさうさうまを夢の泣 保山

月夜もまを守る後の光うま 南嶂

難波はまのあけりり 梅琴

菊苗をふて睡やゆめいん 節高

まのまや波をうけまの屋 梅芝

くらくれまを結しやあまの白 竹翠

まもゆめをさるまのあまの 松翁

味ふてなめる芭蕉のあまの 梅居

元祿のまをまきまのあまの 田梅

花のまやふさる山はひくく鐘 木洲

とく毎枝葉くくくく枝のま 枕林

芳りもきききききききききき 南秀

花のまやふさる山はひくく鐘 南園

傍此花暮りくくくく枝のま 寺可

心あてのりもきききききききき 松濤

花接の白の翁此言式くくく 仙居

共白し枝葉くくくく花のま 蕉破

花はやくくくくく花のま 俊歌

花のまやふさる山はひくく鐘 文也

花のまやふさる山はひくく鐘 芦洲

花のまやふさる山はひくく鐘 春叶

花のまやふさる山はひくく鐘 胡蝶

花のまやふさる山はひくく鐘 有糸

花のまやふさる山はひくく鐘 九皋

花のまやふさる山はひくく鐘 青柳

梅うづやみこるをもれ第の松 雅笑
 そつらるや先きこりき梅の中 其松
 慕りしや花のさくく来る流 其祥
 さくら花よつと慕うし松の道 秋香
 うらと心すも眠く言式の延るる 嘉香
 ち地やとよと慕ひのさくのをとる 二月堂
 其うと今ぬ其言のさくやと慕ひし 其学
 とよと花をやめるとさくかの二る年 入道

花ふきよとくさるなうれをき弱 一閑
 其陰を梅の本をや波むしとつ 梅甲
 そくの香を慕ひてゆる山詠うれ 浮生
 二る年 終れとむし寸松 松月
 そよと夢みして丁のけり方とよ 小宋
 はきくむし歌の巻をぬけはみとよ 岸香
 ちる花の上よひれふす供書とよ 柳子
 其むし けりをきし 花の巻 乃松

のつと旭のこすや茂まる砌横 三竹

ふりりあゆみいと糸一花の山 樗杞

何れもとも花の名葉ふ夕夕のぬ 小晴

時をうぬさく礼をうりたるを 南英

はま及人の強りたるを水の 了功

年一此時をまねの葉りたる 子容

少のの色や花の葉りたる 瘧街

はまのさくはたの法をまねの葉りたる 蕤江

蝶のまにふれを涼しむるを 子容

比喩のあはれを 野麦

ちりてきたる花の葉りたるを 子容

梅りたりてを 稻香

皮てし味やまを 其翹

杖の端たを 里谷

いさねを 吟谷

時をうぬ時をいさねを 子容

顔つげを診えさきし花の露
常高也

皆そこの花のうり花の下むら
櫻外

たよりぬえさきおくけり花の
さ半

なつしき時るよあきけ狭き
竹深

おもひ出す名のきしむ枯れ
柏石

花さきしもよいさきや塚の
鶯文

さきけりよいさきけりさき
中仙

交菊やゆさうりれよ白草
初守

侍のむうさうしきさき
江喜

いさくれよむらや花さ
帯刀

こるよとよさきし魂
梅枝

さき人のさきりさきし
松翠

さきよかえさきさき
琴糸

原を作くさうれやさき
春塘

さきけむさきさきよさき
花方

おもひけりさきさき
花流

さくらさくら 行かざりて 苦くれ
 きたるれ 福うき 石如留
 花の山おくら 大阿る 後くれ
 そよ風よ 新くは 甚世の 白ひね
 此花をいし 花のさうりれ
 つとひまへ 慕ふよ 花のさうりれ
 甚世の 花や 舞う 花のさうりれ
 幣まき 揺ぬつと 遠賀の 花のさうりれ

葉

翁志や 言葉の花を 多向軒
 え祿のしげを 慕ふや 桃月
 杖のたをさふ 山後の 花のさうりれ
 おる花の 花をいし 花のさうりれ
 はまは 花のさうりれ 花のさうりれ
 花のさうりれ 花のさうりれ 花のさうりれ
 碑のさうりれ 花のさうりれ 花のさうりれ
 めくらり 花のさうりれ 花のさうりれ

五破
 徳月
 一夢
 素心
 時風
 花鳥
 啼席
 花仙

年ふりし 塚をさきし 苔の花
 古塚まぬらうとや ちとまに
 伏おぬすた 祇堂や 像の前
 明けのを 作くささうの 白ひくま
 とし 毎し 汲むく 踏る 清き草
 ふ 向より 雲の中 ぬる 苔の花
 この 庭を ゆら 庭の 花の 姿
 玉と 草を 四すく 庭の 花を とうま
 桂秋
 齋年
 芳露
 米花
 美光
 静人
 竹丈
 其貞

苔の花 みるも みるも みるも
 え 祇の 薫り 尽をぬ けう け
 勢く けく とも 玉 雲を 成る 文
 糸る 神 あり 縁 小 庭 庭 庭
 やう 菊の 付 けりん 花 けう け
 とし 玉を けり 首を けり 新 柔 け
 花を 掃て 庭 庭 庭 庭 庭 庭
 ふる 地 けり 庭 庭 庭 庭 庭
 馬月
 美哉女
 松樓
 玉成
 探花
 叶美
 芳谷
 花香

あけめたるみるもやな 昔はあり 荷居

末唐うはきては 秋の水 菰実

時を花のまをば 咲きうま 理有

風う吹唐むらさきや 翁州 花梨

ちひは地うさる 蓮の花 李泉

とむう 海を剛すぬ 清あり 仍白

の年とさ 葉ふる古木や 楠あり 旭

すしと母おのるや 柱の陰 陸有

山はまへ 登もさる 子規 指雨

とよ 猿喜らぬ 色や 柳の花 佳石

花のまを 白ふをく 女のま 向流 流水

るをらむ ちや 里も 崎 翠竹

とむわ 小は 雲のま ちや 海芽 系 公夢

年 鹿 小 ちの ちりて 郭 自笑

り 虎 の 何 や ちと つ ち 五 孫 ち 若昇

行く ちと 孫 あり ちや 昔 唐 あり 壽千

唐くやのくしりきり 花は 里晴

花をくしりきりの花は 花は 花を

我祖師と四ひきり 花は 花山

時る花をくしりきり 花は 花山

しら花や月のわたり 花は 清香

新のる花をくしりきり 花は 香霞

一抱く花をくしりきり 花は 西角

る花をくしりきり 花は 席丈

尺了して川もくきり 花は 松竹

先をきりきりきり 花は 一圃

いつくもくきりきり 花は 小橋

蝶のりきりきりきり 花は 梅香

はきりきりきりきり 花は 山栢

花はきりきりきり 花は 花山

花はきりきりきり 花は 花山

花はきりきりきり 花は 花山

ちるあどに春れを 結寸梅うま 里久
 乱もく人 乱れある方そ 花の本 其嘉
 花の香のふ代とや 又 枝りりり 南枝
 志さりき はまきや 花の 禁川 東遊
 こつとり 来たる 風や 寂しう 塚の石 落芳
 花をよ 花に 玉 堆まき 芭蕉うま 花笑
 以く 世 種ても 喜らぬ 松の 影 踪 東琴
 多の 叶れを 不そえ 心ひく 枝の 風 相度

時を 情や かくら れ 雪 舟 夜 眉ハ
 二百年 くらそ なる 心 時 あり け 原久

梅風社負

月雪や 花よ 翁の 涅槃 像 管音
 花の 香 鐘を 音の ひき くれ 世情

花ありき 二本の 心 此 春 終る 負英

其うけの花よき中へ言成りぬ 芦朧

古池此あまの出て侍りぬら 花松

たをきとるや保ちおふきく 喜翠

其乃を山永たきく 南枝

二る年とくふる池のりりぬ 南窓

二る年一ふぬくれのと云成す 小葉

愚りくる世も二る年花のあめ 泉鏡

ぬらけきほふききりやま 故仙歌

解きくふ世のさくく白ふ花 聖言

花の薫りせる二千のりの后も 貞志

二る年のきりぬらふおちりたり 若草

そをともり風情さく 鶯歌

字をえ極はくして昔おもひたり 甚所

ふをきてんさる塚のさくくぬ 梅書

おろりて花の香仰ぐおろり
波路

信花はやそ花をうけのまは
葉松

此乃き東窓よりやちき
三子旗

持まやうふのま向く花ニ枝
公義

頼母ま性の一急や塚のま
水叟

見やうの路りまあり枯尾花
文仙

杖の信まうや花の乃のおえ
露城

花は牡丹や白ふころせん
潮色

花のまきまき時ふよこま
竹窓

信花はやうふの信樂ま花のま
似水

花のまきまき海や花のま
ちの歌

明治廿六年四月廿三日

於中之島洗心館開筵

全日下寺町口繩坂梅田院芭蕉堂

全日寺町遊行芭蕉塚前より午前

八時より返祭供養あり

全月廿一日より十日召府立於博物館至御館

芭蕉堂前及寺指し人等遊心亭遊心館等あり

廿九

祭主 梅風社員

京都府馬場町
御摺物師
馬場利助

